

平成12年2月10日

石油連盟国際会議
大型油回収システム訓練実施とその効果」(補足プレゼンテーション)

日本マリン(株)水島支店
現業課 守安寿志

2号基地防除資機材の維持管理業務を担当しております、
日本マリンの守安でございます。

第2号瀬戸内基地にも平成9年に発生したナホトカ号流出油事故の教訓から、更に
大規模の油回収システムが昨年4月に配備されました。
このシステムはデンマークのロークリーンデスミ社製のタランチュラシステムと言いま
す。

このシステムは「スラスター付スキマーヘッド」・「パワーパック及びクレーン」そして「ホ
ースリール」の3つの主要機器から構成され、毎時250m³のポンプ能力を持ち、20
フィートのコンテナに収納することができます。

昨年の5月にこのシステムと一緒に納入された集油システムを使用して、岡山県の水
島港沖合いで石油連盟主催の運用訓練を実施しました。
訓練項目は船舶2隻による「J字型オイルフェンス展開・回収訓練」、「タランチュラ」を使
用した油回収訓練・オイルバックの運用訓練をおこないましたが、以下その感想を述
べてみたいと思います。

まず、3日間にわたる訓練を振り返って感じた印象は、初めての大きな訓練にして
は概ね満足の行くものだったと思いました。しかしながら、ある部分につきましては訓
練する期間に合わせて前もって準備し、手配しておりましたので、むしろ、「うまく行っ
て当たり前」だった部分があった事は否めません。

まず、母船に使用された「新日丸」は機能性に優れた船舶で、充分過ぎるほどの広い
デッキを持ち、かなりたくさんの訓練人員が乗船したにもかかわらずゆったりした環境
での作業が可能でした。

「新日丸」のような理想的な作業船は日本には数えるほどしかないと考えますし、不
慮の事故が発生した時に地理的に遠方にいる場合、或いは他の仕事に従事している
可能性から確保するのが困難であることも考えられますので、その場合を想定して機
能性のおとる台船等での訓練もこれからやってみよう必要があると考えます。

母船 作業船ともいつ、なんどきにでも手当てが可能なものではありません。
従いまして、不慮の事故が発生した時、これらの手当てが困難な場合は初期の出動体制に大きな支障をきたします。

よって、特に作業船に関しては、常日頃から具体的な船名をリストアップし、その連絡先、そして定期的に現在位置を確認できるような報告システムなどを確立するのモ一案かと考えます。

甲板上の指揮者間・母船と作業船間・船陸間の連絡系統の統一については今回、母船に装備されている無線機を借用して行われましたが、緊急時においては、準備不足の場合コミュニケーションが取れなくなり、通信機器をどこが準備するのかなど、効果的な通信連絡を確保できる手段の確立が必要であると考えます。

又、船舶上での指揮命令系統についても、今回の訓練では事前に計画されておりスムーズな運用ができましたが、緊急時ではどの様になるのか不安があります。

次に、私自身、今回の指揮者としての経験から申しますと、指揮者は理想的なJフォーメーションをイメージし、全体を見ながら目標地域に進行する際に、潮流、風向き、風力等を計算に入れ、的確な判断を瞬時に決定し、その指示を母船と作業船に出していくことが必要であることを痛感しました。

その為には指示内容を明確に相手に伝達すること。狭い瀬戸内海域では機能性の良い母船及び作業船が必要であること。又、海洋条件を的確に読み取る判断力の習熟などが重要であると考えます。

最後に、この訓練で感じたことの一つに、訓練で「うまく行って当たり前」のカテゴリーに属する事項は逆説的には不慮の事故においては、簡単に「うまく行かない」カテゴリーに転換してしまう可能性があるのではないかと思います。

今後も、万一に備えて日々の維持管理業務と訓練に励んでまいりたいと考えております。

以上で発表をおわります。